
安藤家

庵樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安藤家

【Nコード】

N4334I

【作者名】

庵樹

【あらすじ】

過ぎ去った時間は、時に優しく、時に冷たい。幼き頃から変わらずそこにあるもの

(前書き)

私の育った安藤家…三人姉妹は、それぞれクラスで『お嬢様』というあだ名がつく位、その土地ではお高い気取った家だった。20年前は七人家族が、今は五軒の住まいに別れてしまったけれど

私が、子供の頃使っていた、沢山小さな黄色のハート柄が散りばめられた赤いハンカチ：そのお気に入りも成長とともに使わなくなっていた。その代わり、毎朝、父に持たせるお弁当を包むハンカチとして、母が使うようになっていた。朝、未だ手の係るやんちゃ盛りの三人の子の着替えをさせ、慌ただしさの中でも、自らもキャリアウーマンとして働いていたものだから、小綺麗に身なりを整え出掛けていく様子は、娘の私から見ても、格好良く、母は私の自慢だった。私の父と母は、若くして結婚し、父の実家を継いだという事もあった為、恐らく、二人の甘い新婚生活というものは、あまりなかったのだと思う。そんな中ではあったが、毎朝父に渡す弁当包みは、一時、母が父に対する愛情を、形にできるものだったのだろう。

あの賑かだった時間から、約20年が経とうとしている。月日とともに、両親の価値観や生活も擦れ違いをみせ、二人は何年か前に離婚をした。そして今、それぞれのパートナーと自らの生きる意を見出し始める年齢となった。

若い頃から、自らの人生の完璧さを追い求めてきた父は、昔から山登りを趣味としていた。“山岳会”という仲間を持つ程、熱心に取り組んでいた事もある。私も幼い頃は、よく父に連れられ色々な山に登っていた。その当時は、山登りの価値等判る訳もなく、唯、“負けん気の強さ”だけで登っていたが、今、振り返れば、あの頃の体験が今の私を支えてくれている事に気付く、父には感謝をしている。

平成19年7月始め、今の父の奥さんから私宛ての手紙：封を開ければ見覚えのある布地で作られた巾着袋一つ……美智子さんからの手紙『安藤舞子様』

明けそつで明けない東北の梅雨に、洗濯物を干す場所を求めて行ったり来たりで、すっかり疲れてしまつ始末で御座います。お変わりなくお元気でご活躍の事と存じます。8/2夜、須賀川を出発して、

お父さんがお友達と二人で二泊、山小屋で泊まりながら、穂高岳への登山に出掛けます。安達太良山と磐梯山を、私と二人で登った時も、お父さんは舞子さんのハンカチをいつも愛用しておりました。

縫い付けたゴムも古くなり、見かねて、今度は私が使っております。赤いバンダナを譲る事に致しました。登山には目印として赤い色が必要な筈で、舞子さんの小さなハンカチも、お父さんや仲間を助けていた筈だと思います。舞子さんの赤いハンカチに感謝して、手縫いで袋を作り、又、舞子さんに使って頂きたいと思います。今度は、私が譲った赤いバンダナがお父さんを守ります。かしこ… H 1

9・7・31 安藤美智子

母の後、父の後妻と

なった美智子さんという人は、父を誰よりも愛し、大切にしてくれている人だ。だからこそ、今回の送り物は、彼女なりの、父と私の思い出を大切にしたいという行動の表れだったのだろうと思う。

その封を開け、一通り手紙を読み終えた時、私は、美智子さんへの有難さを感じながらも、同時に強いショックを覚えた。常にプライドを高く持ち、余り人に弱味をみせる事の無い父が、唯一、あの頃の思い出残るハンカチを、静かに持っていたという事… 父という人柄が、変わらず今もそこにあつた。

平成1

9年9月中端、私は少し遅めの夏休みを貰い、実家のある福島に帰った。今の母の住まいに行き、どのような反応を返してくるかな？と思いつつも、恐るおそる、母にあのハート柄の赤い巾着袋を見せた。…瞬時に母の表情が変わり、思いを上手く言葉にできない様子… 私は今、此処に、この巾着袋を手に行っている経緯を話し始めた。『この巾着袋、美智子さんが私につけて送ってきてくれたものなんだ。お母さん、この布地、覚えてるでしょ？今でもお父さん山登り続けてるみたいなんだ。その時は、必ずこのハンカチを持って行って使ってたみたいなんだ。縫い目がほつれてきても、使い続けてるものだから、ある時、美智子さんが、『なぜ、いつもそのハンカチを山に持っていくのですか？』と聞いたら、『これは、舞子が小さい頃使ってたものなんだ』って、答えたんだった。だけ

ど、あまりにもこのハンカチが見ずばらしくなってきたものだから、お父さんには、新しい赤い綺麗なバンダナ、私には巾着袋を縫って『このハンカチを、又、舞子さんにお返し致します』って、送ってきたんだよ。』

一通りの説明を終え、少し、思いの荷が下ろせた気がした 母を見ると、涙を溢していた 『なんで泣いてんの？』と、私は聞いた 母は『お父さんのあの人らしい想いに、お父さんとお母さん二人しか判らない、あの頃の思い出を、その布地を見て、思い出しちゃってさ……』 『あんだ達、子供にも判らない二人の思い出が、そのハンカチには詰ってるんだよ。』

今、穏やかに、あの頃と父を思う心が持てるように成っていた母に、私も感動していた “巾着袋”と化した、ハート柄の赤いハンカチ…端には、あの頃の私のヘタクソなでっかい字で“まいこ”と書いてある

今は、毎日の私の通勤バッグの中に…若かりし頃の、二人のラブストーリーを秘めて……

(後書き)

恋愛でも肉親関係であっても、想いを全て言葉にできれば良いのに
∴言葉にはならない優しさがあるのなら、静かに呑み込む方が良い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4334i/>

安藤家

2010年10月8日15時07分発行